集落支援員だより

第38号
発行者　東和地域集落支援員
連絡先　６６－２４９０
発行日　令和５年10月２５日（水）

集落に活気がでてきた！

～ECC国際外語専門学校との交流　水舟・高槻集落～

９月５日（火）農家民宿まとばにおいて、大阪にあるＥＣＣ国際外語専門学校の学生６人と先生が水舟・高槻集落等の皆さんと交流しました。

ベトナム・マレーシア・ネパールからきている学生が、おにぎりつくり、餅つき、夜は郷土食をいただきながら賑やかに交流し、３軒の農家民宿に分かれて宿泊しました。

受入代表の村松義正さんからは、「コロナ禍以前は毎年交流していた。受け入れることで集落に活気が出てきた。やらない手はない！」と述べ、意気込みが伝わってきました。

美味しいおむすびできました！

ベトナムの学生と地元のお母さんとの交流

専門学校の先生からは、「学校に福島県出身の先生がいたことから、震災の時私たちにできることはないかと交流が始まった。福島の人の温かさをしみじみ感じている。」と述べ、交流を楽しんでいる様子がうかがえました。多様な人と人との交流が地域を元気にすると実感しました。（引地取材）

はじめての餅つき体験

福島県農業賞　ご夫婦で受賞！

第64回福島県農業賞に佐藤佐市さん、洋子さん夫妻が受賞されました。今回は、受賞された佐藤佐市さんに農業についてお話を伺いました。

「農業と地域の継承について」

佐藤佐市さん（太田）

今、東和地域のみならず全国の農山村、とりわけ中山間地域の集落の存続と継承には、多くの人が不安に思っています。

私は、高校卒業後、ここ東和で農業をしています。好きでも嫌いでもなく当たり前のように「農」と「我が家」を引き継いで53年になりました。この間、農業も地域も大きく変わりました。耕運機からトラクターへ、鎌からコンバインへ、米価２万円台から１万円すれすれに、そして農集電話からスマホへ。50年から１００年に１度の大災害が度々（異常気象）（原発事故）起きたりと、長い日本の農業、農村の歴史の中でもこれだけの短期間での変化の大きさは異常かもしれません。私たちは、小さな東和地域だからこそ持続可能な農業にするためにも、今までの当たり前の農法を見直す時期に来ています。

国連は２０１９年から２０２８年までを「家族農業の10年」と定めました。世界の食料生産の８割は家族農業が担っています。家族農業は、その地域のネットワークや文化に組み込まれ、地域づくりに大きく貢献しています。

そのような中、福島県内の新規就農者数の調査（平成23年から令和５年まで）では、現時点で３６７人になりました。過去最高です。

東和地域は県内でも有数の受け入れを誇っています。「ゆうきの里東和」等、就農希望者の研修受け入れ農家の地道な努力の成果であり、地域農業と農村の継承の大きな光となりつつあります。現在、地域に残っている若者も年々少なくなっていますが、新規に集落に入ってくる若者と、協働して将来の集落を考えてもらえたら嬉しいです。

最後になりましたが、福島県から第６４回の農業賞を頂きました。今まで私たちを支えてくれた多くの仲間の皆さんに感謝いたします。

研修生の渡邊さんと

グランドカバーの栽培に魅せられて

本多一毅さん（戸沢）

本多さん宅では、祖父母の代には養蚕を生業にしており、養蚕が衰退し始めた昭和後期頃からトマト栽培、そしてシイタケ（乾燥）の生産に切り替えました。

その後、平成10年頃からトマト栽培していたビニールハウスを利用し、グランドカバー（地表を覆うために植栽する植物）栽培に方向転換を図りました。栽培している花の種類は、斑入りヤブラン、ヘメロカリス、玉竜など約30種類です。主な取引先は、県内外の公共施設が多く、皆さんの目に触れる場所に多く植栽され、癒し効果になっていると思われます。

取引先が多いため出荷に追われる日々ですが、街中でグランドカバーを見ると、自分が育てた花かとつい立ち止まる時もあると言います。

花の栽培は生き物と同じで、毎日が温度管理や、灌水と忙しい日々ではありますが、今後はたまの休みをエンジョイ出来るよう計画を立て、仕事の中での休日も重視していきたいと話していました。

（菅野取材）

斑入りヤブラン

機械と共に

～トラクターは長年のパートナー～

菅野　興さん（戸沢）

現役のコマツトラクター

菅野興さんは、約35年くらい前に、知り合いの紹介で小松インターナショナル社製の272L型トラクターを入手しました。272L型トラクターは1973年製造。半世紀も前に作られたトラクターで、動いているのが珍しいくらいの代物です。

昔の機械は堅牢な作りなので、使い方次第では長持ちもして、いまだに現役として活躍しているようです。エンジンのかかりも良く、大きな故障もないという事です。

現在は、牧草の集草や攪拌専用として使用しており、年間約30時間程使用しているそうです。

生産から50年以上経過している今では、部品の取り寄せは不可能なので大事に扱い、小さな故障などは興さん自身で修理しているようです。

「これから先、何年動いてくれるか分からないが、機械と会話をしながら、大事に付き合っていきたい」と興さんは言っていました。

（菅野取材）

トラクター全景

～さわやかな風～

「再び東和で暮らすようになって」

鴫原南美さん（針道）

私は、結婚し約10年ぶりに再び東和で暮らすようになりました。自分が親となったことは、この東和地域とここに暮らす人々について、改めて考えるきっかけとなっています。

私は「とうわつながるマルシェ」の活動に参加しています。現在は、若い世代の親とその子を中心に、楽しく明るく、地元に愛着を持って、東和地域で開催する等活動しています。催しに足を運んでくださる人々を含めて、この地域の活性化に寄与するエネルギーを感じています。

また活動をとおして、先輩達が東和を大事に元気にしてくれていたことが、今日までに続いていると気がつく場面もありました。

私の子ども達が成人した頃には、この東和地域がどうなっているか分かりませんが、子ども達には、東和で育ったことを嬉しく楽しく話せるようであって欲しいと願います。それは、今の私がそう思うからであり、それは幸せなことだと思っているからです。これからも家族とともに、この東和で心豊かに過ごしたいと感じています。